

ああ、ただ秘めよ、御くるすの愛の徴を

五足の靴 北原白秋ら

『五足の靴』とは、明治40年（1907）8月新詩社主幹の与謝野鉄幹（寛）と北原白秋・木下空太郎・平野万里・吉井勇の5人が九州のキリストン遺跡を巡ったときの紀行文の題名である。明治40年7月28日から8月27日の1ヶ月の長期に亘った。

行 程

東京・巖島・赤間関（下関）・福岡・柳河・唐津・佐世保・平戸・長崎・茂木・天草・三角・島原・長洲・熊本・阿蘇・熊本・柳河・東京

主として九州西部のキリスト教遺跡を中心として、その異国的な風土とキリスト教遺跡を探った旅であった。この旅の紀行文を五人が交互に執筆して東京二六新聞に掲載された。

五足の靴・メンバー

与謝野鉄幹（明星主宰35歳）・北原白秋（早大文科1年23歳）・木下杢太郎（大田正雄・東大医科1年23歳）・平野万里（東大工科23歳）・吉井勇（早大文科1年22歳）

資料：国書刊行発行『五足の軒と熊本・天草』濱名志松著



紀行文『五足の靴』と『邪宗門』

五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た。彼等は面の皮も厚く無く、大胆でもない。而も彼らをして少しく重味あり大量あるが如くに見せしむるものは、その厚皮な、形の大きい五足の靴の御蔭だ ・・・・

の書き出しで始まっている。第1回の掲載が8月7日で、凡そ10日ぐらい遅れて連載され9月10日、29回で終わっている。この旅行が一行五人のその後の文芸活動に画期的な影響を与える、いわゆる所謂南蛮文化の先駆をなしたことは多くの人に知られている。

北原白秋を詩人として決定的にした明治42年刊の『邪宗門』はこの九州旅行の結晶であった。

